

高山彦九郎はこんな人

高山彦九郎は江戸時代の延享4年(1747)5月8日上野国新田郡細谷村(現群馬県太田市細谷町)に農民である高山彦八正教の次男として生まれました。名は正之、字(あざな)は仲繩、号は赤城・金山、通称を彦九郎といます。蒲生君平・林子平とともに寛政期に先駆的な政治理念を抱いた一人です。

13歳の時『太平記』を読んで、「(建武の)中興の志業の遂げられざるを見て、慨然と発奮し、功名の志しあり」と、水戸彰考館総裁杉山忠亮の『高山正之伝』は伝えています。18歳になると学者を志し、置手紙を残し、帯刀して京へ遊学しました。京では漢学者の岡白駒に学んでいます。伊勢崎でも村士玉水などから垂加神道の尊王思想の影響を強く受けたとされます。

彦九郎27歳(安永2年)からの膨大な日記が残されています。日記の記録から蝦夷地(北海道)、四国以外ほぼ全国に及ぶ旅をしています。日記にはその土地の地誌や里談、自然災害、うちこわしなどの社会状況、忠義・孝行などの伝聞のほか、極めて多数に上る人々との、幅広い交流が記録されています。江戸では、蘭学者前野良沢・儒学者細井平洲築次正服部栗斎京では、高芙蓉大村彦太郎・公家の岩倉具選・芝山持豊。水戸では立原翠軒藤田幽谷など多岐にわたる人々に及んでいます。

彦九郎は多くの人々との間を交流し、情報の媒介者として、全国をくまなく遊歴した旅の思想家です。寛政3年(1791)7月19日、京を立ち、九州へと旅を続けた後、寛政5年(1793)6月27日筑後国(現福岡県)久留米の森嘉膳(嘉善)宅で自刃し、47歳(数え)の生涯を閉じます。

彦九郎の自刃後各地で彦九郎を敬慕する尊王の人々の動きが現われます。江戸中頃の幕藩体制崩壊の兆しの中で、近代を告げる彦九郎の尊王思想の先駆的な行動と実践は、吉田松陰・高杉晋作久坂玄瑞・中岡慎太郎・西郷隆盛を始めとする幕末の志士達に強い影響を与え続けました。

